
CSI:マイアミ 青い薔薇

平安調美人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C S I・マイアミ 青い薔薇

【Zコード】

Z8037E

【作者名】

平安調美人

【あらすじ】

火災現場から死体が発見される。疑惑の焼死体、成長が止まった子供、隠蔽された失踪、憎しみ。被害が拡大する前に、食い止めろ！

プロローグ（前書き）

この物語は、「CSI：科学捜査班」のスピンオフ作品の一つ、「CSI：マイアミ」を基に作成したフィクションです。
登場人物、会社名、事件等はテレビシリーズとは全く関係ありません。

この話の登場人物の口調並びに呼び方は、吹替版を意識しています
(一部で字幕版を意識したセリフもありますが)
人物設定は、シーズン5の設定を意識していますので、まだ見ていない方にはご注意ください。

プロローグ

ホレイショ・ケイン警部補は、出勤する前に必ず墓場に向かう。そこには、結婚して半日も経たないうちに逝ってしまった若き妻が眠っている。

余命幾ばくもないとわかつていながら、残された時間を一人で過ごし、女の幸せを味わわせてあげようと誓っていた矢先に、妻は新興マフィアの凶弾に倒れた。

「まさか、今夜のディナー、すっぽかすつもりじゃないよね？」命の灯火が最高潮になつていても係わらず、妻はやさしく微笑んだ。薬指に結婚指輪を嵌めた左手をホレイショが握ると、彼女は眠るように目を閉じたまま、息を引き取つた。

あれから3ヶ月、ホレイショは立ち直つていない。

犯罪者に対して一切容赦なく当たるが、社会的弱者には限りなくやさしいが、家族に恵まれず、愛にも恵まれていない。

これから愛すべき妻おんながいなくなつて、彼の心は砂漠のように乾いている。

これは罰だらうか？

確かに自分の右手と右頬は血で穢れている。犯罪者だけではなく、守るべき者の血までも染み込んでいる。いくら母なる海で清めても、その血は消えることもなく、また新たな血で穢れてしまう。そんな繰り返しである。

その穢れた手で人を愛することは罪なんだろうかと。

ホレイショは立ち上がる。守るべき者のために、弱き者のために、そして、信頼できる者のために戦い続ける。そのためなら、自分の命を引き換える構わない。

墓の前で跪く姿勢から立ち上がり、青い瞳を隠すためにサングラスをかけてから、ハマーに乗り込んだ。

第1話 疑惑の焼死体

出勤してから間もない頃に携帯電話が鳴り出し、ホレイショはサブディスプレイを見る。内容は「701スター・アイランドの火災現場から死体発見」と表示された。

オフィスからフィールドキットを取り出し、蓋を開けて中身をチエックし、机に飾っている写真に無言で問い合わせる。
しばらくしてからオフィスを去り、ハマーに乗り込んで現場へ向かう。

スター・アイランドは高級住宅街で、その名の通り、ハリウッド・セレブや実業家などの富裕層の別荘が多い島という意味からつけられている。

マイアミは平均気温が28度の熱帯地域で冬も暖かいため、冬の間にだけ過ごすセレブたちや第二の人生を過ごす者たちが後を絶たない。

しかし、光あるところに影があり。マイアミは中南米からの玄関口と呼ばれるほど、観光客だけではなく、麻薬や違法武器が持ち込まれているため、それに絡む凶悪犯罪が後を絶たない。殺人事件でも年間200件以上、年間800人以上が殺人事件で命を落としている。全米きつてのリゾート地であると同時に、全米で十指に入る犯罪多発地帯でもある。おまけに移民コミュニティでのトラブルもあり、対処するのも一筋縄ではない。

ハマーが現場に到着すると、乳白色のラテックス製の手袋を嵌め、フィールドキットを携えてから、立ち入り禁止の黄色いテープをくぐる。

「ひどい有様だ」

体格のいい禿頭の男が口を開いた。殺人課刑事のフランク・トリップである。

「何があった?」

「911に火災通報があり、消防作業を終えたら、リビングから焼死体を発見した」

「所有者は？」

「ジョームズ・ウェスト。マイアミ州立大学院で細胞学を研究する博士で、グラシア・コスメティック社の名誉顧問を兼ねていたそうだ」

「グラシア・コスメティック社といえば、知らない女がないほどだ」

ホレイショは焼死体の近くで片膝を折り曲げてから、姿勢を低くする。

「体を丸めたままになっている。よほど大切なものを抱えているかのようだ」

「秘書から聞くところによると、彼には8歳の娘がいたそうだ」

「8歳か…」

悲しそうな瞳で焼死体を見る。妻が生きていれば、子供が持てる幸せを分かち合はずだつた。余命幾ばくもない彼女に少しでも生きる希望があれば、病気に打ち勝てると思った。今を思えば、彼女と過ごす時間を最優先にすべきだつたと後悔している。

科学捜査班、通称CSIチームの主任たるものは、甘えることすら許されない。一つでも気を緩めると、チームの士気に大きな影響を及ぼす。その所為で、科学捜査研究所（CSIラボ）閉鎖に追い込まれる事態が起きた。その災いの種を蒔いた者は、今では汚名返上のために懸命に働き、禊を終えた。

ホレイショは妻を亡くした悲しみを隠しながら仕事をこなしていく。毎日のように起きた事件をいち早く片付けて、遺族たちに安らぎをもたらすことが、彼が生きる術である。

「俺は秘書と開発部主任の聴衆を続ける」

トリップがホレイショに告げてから去ると、擦れ違いにエリック・デルコがやってきた。

「何があつたんですか？」

「俺も今、来たところだ」

ホレイショが立ち上ると、

「見たところ、無理心中するため自ら燃焼促進剤を撒いて火を点けたようだ。デルコ、遺体の写真を撮つて、床を調べてみてくれ」

デルコが写真を撮つて、床からサンプルを採取してから証拠袋に入れる。

しばらくして、検死官のアレックス・ウッズが現れ、遺体を調べる。

「アレックス、どう思う?」

ホレイショは両手を腰に当てながら、目線を低くすると、「そうね、後頭部から背中、二の腕の一部や足の裏に3度の火傷の痕がある。子供を抱き抱えた部分にはなかつた。でも、後頭部に打撲傷があるのはどうかしらね? 子供には火傷の痕がないわ。解剖して、死因を特定する必要があるわ」

2人の遺体をビニール袋に入れてからストレッチャーに乗せると、「可哀相に、たつた3年で天に召されるだなんて…」

「アレックス、この子は8歳だったそうだ」

「8歳ですって! ? 信じられない。とても3歳児の体型でしか見えないのだけど、気になることがあるの」

アレックスが子供の遺体を起こして、着ていた服の面テープを外すと、皮膚に痣のようなシミが体全体に広がっている。

「虐待されたのかしら? ?」

「解剖前にレントゲンとUV写真を撮つて、DNAを分析に回してくれ」

「ナタリアに協力してもらおうわ」

「ああ、頼む」

アレックスが指示をすると、運搬員たちがストレッチャーを動かし、運び込んだ。

ホレイショがトリップのもとへ歩み寄つて、ノートに目を通すと、

「ナデイア・スティーヴンスさん?」

立ち入り禁止の黄色いテープに立っている女性に声をかける。

「私は、現場検証の指揮を執っています、ホレイショ・ケイン警部補と申します。ウェスト博士の秘書をしていらっしゃるのですね？」

「はい…」

「少し質問をいたしますが、秘書になられてどのくらいですか？」

「3ヶ月と少し」

「秘書になられる前は？」

「ヨガのインストラクターをしていました。勤めていたスポーツ施設が倒産して、職を探していた時に、グラシア・コスメティック社のセールスをしていた親友に誘われて、説明会を聞いた帰りに、開発部主任から博士の秘書になってくれないかと誘われました」

「火災が起きる前、博士に何か思い詰めたことは？」

「親友の行方を告げた後で、それから誰かと争つてきたような物音が、留守電に録音されていて…」

「ようしかつたら、そのテープを提出できますか？」

「ええ、お役に立てれば…」

デルコがホレイショに呼びかけると、「失礼」と言つてからその場を外す。

「遺体の近くからこんなものを見つけました」

デルコが持つてきたのは、ガソリンの缶だった。しかし、黒焦げの上に水を浴びてしまつたため、指紋が採取できない。

ちょうどその時に、ブロンドをボニー・テールに結い上げたカリーデュケーンが現れた。

「庭に足跡を見つけたわ、凶器らしきものも」

ホレイショは推理した。博士は秘書に電話をかけている間に、侵入者によって後頭部を殴られ、ふらついた体で娘を抱き抱えて意識を失う。侵入者が博士にガソリンを撒いて、火を点け、凶器を庭に捨ててから車で逃げ去つた。

「よし、分担しよう。デルコは中から、カリーハは外から調べてくれ。これはれつきとした殺人だ」

2人の遺体が検死台に乗せられた時、白衣を着たナタリア・ボア・ヴィスターがやってきた。

「アレックス、チーフから検死室へ向かうようにと指示があつたけど？」

「解剖する前に子供の遺体をざつと見てけようだい」

「ものすごい痣のようなシミがある。虐待されたのかしら？」

と言いながら、ナタリアは子供の遺体をUV写真に収める。そのことによって、肉眼では見えない痣を浮き上がらすことができる。ナタリア・ボア・ヴィスターは、未解決凶悪犯罪、通称コールド・ケースを専門とするDNA分析官として、1年半前に赴任してきた。国に助成金を頼み込んで、ラボを改築させた張本人だが、実はFBIから送られてきたスパイだった。

予てからマイアミ・デイド署CSIがずさんな捜査をしたこと、FBIはその実態を調べてくるようにナタリアを送り込んだ。情報を仕入れるためなら、男とつきあうことも厭わなかつたが、根が眞面目な彼女は最後まで冷酷にならず、新興マフィアのマラ・ノーチェから押収した現金紛失事件で同僚が次々と尋問を受けてしまうことを目のあたりにして、やつと曰が覚めた。そのことによって、解雇される覚悟を決めていたが、ホレイショの計らいによって、現場捜査官として再出発した。

同じレベル1捜査官のライアン・ウルフから叱咤を受けたり、実妹が誘拐されたり、元夫への殺害容疑をかけられたりもしたが、ナタリアは捜査官として大きく成長し、過去の汚名を返上することができた。

「それからDNAも詳しく調べてちょうだい。特にミトコンドリアDNA」

ナタリアが子供の遺体からDNAを採取し、証拠袋に入れると、「UV写真とDNA、何か答えがわかるかも知れないわ」

第2話 欲望の対価

カリーやは庭で発見した足跡をカメラに収め、周辺を枠で囲んでから、石膏の袋を振る。

足跡は犯人特定に繋がる貴重な材料である。靴の減り具合、歩き方のクセ、足跡の幅などは人それぞれ違う。例えば、靴の先端が極端に磨り減つていれば、職業は長時間アクセルを踏むとラックの運転手と推測できるし、足跡の長さから計算して身長を特定することができるし、侵入口の特定もできる。

最近では靴底の形状や模様、メーカーなどのデータベースが存在しており、見えない床には静電気を起こして足跡を浮かび上がらせたりと見えない証拠を採取するための努力や工夫が欠かせない。

石膏を枠の中に流し込み、乾かしている間、カリーやは凶器と思われる斧から毛髪や頭皮の一部をピンセットで摘み上げ、証拠袋に入れる。次にフィールドキットから黒色粉末と刷毛を取り出して、柄に付着させ、ゼラチンテープで指紋を採取し、綿棒で擦り付ける。

一方、デルコは中から証拠を採取しようとすると、高熱の炎と水によつて使える証拠がほとんどなかつた。

「お手上げだ」

デルコがカリーやの許へ向かうと、

「そうね、使える証拠は足跡とこの斧だけ」

「じゃ、俺、ここにいる関係者から指紋とDNAと靴底を採取していくる

「よろしくね」

デルコはハマーに戻り、リアドアを開けると、現場近くにいる人々に証拠採取の協力を求め、指紋、DNA、靴底のサンプルを採取していく。

「今朝未明、701スター・アイランドの豪邸から火災が起き、2人の焼死体が発見されました。豪邸の所有者はマイアミ州立大学大学院で細胞学を研究しているジェームズ・ウェスト博士。焼死体はウェスト博士と8歳の娘と思われ、CSIは全力を挙げて捜査をしているところです。ウェスト博士は…」

AV分析官のダン・クーパーがテレビのニュースを見ているところをライアン・ウルフが現れ、リモコンを取り上げられる。

「おいおい、せっかくいいところだつたのに…」

ダンが愚痴をこぼすと、

「今、何時だと思ってるんだ？出勤時間が過ぎてるけど…」

「エリカが出ているのが気に食わないのか？」

ダンが言っているエリカとは、先程テレビに出ていたレポーターのエリカ・サイクスのことである。CSIが捜査中に土足で入り込んだり、ウルフに情報を聞き出しそうとしたりと特ダネを得るために、手段を選ばない女だが、たまに役に立つ情報を提供することもあつて、今ではCSIとは腐れ縁の関係にある。

「僕が言っているのは、1週間前の失踪事件だ」

「ああ、グラシア・コスメティック社のセールスレディの」

ウルフが担当している失踪事件とは、グラシア・コスメティック社に勤務しているセールスレディが自宅から失踪した事件のことである。

彼女は塗るだけで、脂肪を燃焼してくれるクリームのセールスをしていた。

ここ半年前からグラシア・コスメティック社が販売している脂肪燃焼クリーム『ロサアスル』が爆発的に売れている。しかし、店頭販売を一切せず、セールスレディ自らが広告塔になり、顧客を増やしていくた。

アメリカは『肥満大国』と言つていいほど、肥満人口の割合が高

い。特に女性の肥満人口が男性より多く、大人より子供のほうが肥満率が高い。原因は様々だが、第一に取り上げられるのが食事の量。お腹が満たされれば、味などは一の次で、ほとんどの人は料理をしないか、簡単に済ませる。日本食はヘルシーと謳つていながら、コーラなどの炭酸飲料をがぶ飲みしながら天ぷらやすき焼きを多く食べ、野菜も生野菜サラダを少量で済ます。子供の頃から砂糖たっぷり、脂肪たっぷり、肉食中心で育てられたため、大人になつても変えられない。最近では肥満に関連したと考えられる医療費の増大で、健康保健の破綻が叫ばれているが、一部では太る文化への弾圧だととか、アメリカの霸権主義だと非難している者がいる。

とはいって、たくさん食べれば幸せと感じるアメリカ人にとって、『ロサアスル』は魔法のクリームといつていいほどだ。塗るだけで脂肪が燃焼し、たつた1ヶ月で10ポンド（約4キログラム）の体重が落ち、ウエストが2インチ（約6センチ）もサイズダウンしてくれるのだから。

セールスレディからのロコモによって、本社があるマイアミだけではなく、アメリカ全土でも顧客が増えている。

しかし、値段は安くない。クリームが4オンス（約112グラム）で300ドル、サプリメントが90粒で50ドル、セットで買うと250ドルであることから、肥満に悩む者にとっては高くない値段である。

それから3ヶ月、セールスレディが次々と失踪する事件が起きたが、事件性が低いため、警察は捜査していない。1週間前からウルフが担当している事件もそうだが、そう簡単に引き下がれないのは彼の性分である。

ライアン・ウルフは、パトロール巡査だった。ボストン・カレッジで化学を専攻し、卒業後は警察学校を経てパトロール巡査の仕事をこなす傍ら、夜学で遺伝学の修士を獲得した。ある事件でホレイショに才能を認められ、志願してCSIに転属した。仕事熱心だが、要領の悪さが玉に瑕で、周囲からひんしゅくを買われたり、エリカ

の口車に乗せられたりするが、ホレイショから褒められるためなら、例え地道な仕事でも手を抜かない。

ダンに頼んだのは、被害者が失踪する前に不審者がいかどうかをチェックしてもらうためである。何の前触れもなく人間が消えることなど、分子的には不可能なことだ。イリュージョンだつて、下準備があつてこそ可能になる。ウルフは失踪前に何かがあると考え、管理人から防犯カメラのデータを押収して、ダンに分析を頼んだ。

非常口から不審者が入り、防犯カメラの視界に消えると、3分後に寝袋のようなもので担いだ不審者が非常口から出て行った。非常口付近に証拠を残しているに違いないと確信したウルフは、フードキットを携えて、CSIエラボを出た。

第3話 足跡は語る

ホレイショはマイアミ・デイド署に戻り、白衣を着けてから、検死室に入る。

これまで数多くの遺体をこの田で見てきた。犠牲になつた者、犯罪に染まつた者、世話になつた者、息子同然の部下、そして愛する人。

命の輝きをなくしてしまえば、その区別もなく平等に扱われる。検死室はまさにその平等に扱われる場所としては相応しい場所である。

遺体が検死台に乗せられる度に、ホレイショは胸が痛む。特に子供たちといった弱き者が短い生涯を閉じてしまった時、ホレイショは真相を確かめたいと同時に、強制的に閉じた犯罪者を許さない気分に駆られる。

アレックスは仕事で数多くの遺体を検死し続けているが、子供の遺体には心が痛む。もしも、自分の息子や娘が遺体として検死台に乗せられたら、冷静に保てられない。

マイアミは子供においては危険極まりないところであるが、だからといって100%子供の安全を守つてくれるところがあるわけない。そんな時勢のなか子供を守るために、母親であるアレックスが何をすべきなのを考えながら仕事に励んでいる。

「死因はわかったか?」

「ウェスト博士の死因はすぐにわかつた。鈍器による頭蓋骨骨折。3度の火傷はその後だった。でも意外なことに、そつ長く生きられなかつた」

「と言つと?」

「末期ガンだったのよ。尿検査で調べてみたら、マリファナの反応があつた」

「博士は何かにとりつかれたようだ。確か…、トリップの説明では

…

ホレイショはトリップ刑事からの説明を聞いた記憶を思い起こす。ウェスト博士はマイアミ州立大学大学院で細胞学を研究している傍ら、グラシア・コスメティック社の名誉顧問を兼ねていたことを思い出すと、アレックスが口を揃えて、

「知り合いがグラシア・コスメティック社のセールスレディをやつていたけど、1ヵ月前から連絡がないの。博士の死と何か関係があるのかしら？」

「それはあるかも知れんな。アレックス、8歳の娘の死因は？」

「一酸化炭素中毒死。皮膚がピンク色になっているのがわかるでしょう？」

「なるほど。解剖前にレントゲンとDNAはどうした？」

「DNAはナタリアに依頼したけど、レントゲンを見てちょうどいい。どう見ても、3歳児の骨格だわ」

「成長が止まつたんだ。ミトコンドリアDNAに変異がなければいいのだが…」

ホレイショはすぐにナタリアの携帯番号にダイヤルを入れる。「ナタリア、ウェスト博士の娘のミトコンドリアDNAを最優先で調べてくれ」

ホレイショが携帯電話の終話ボタンを押して、ポケットに仕舞い込むと、アレックスが口を開いて、

「ホレイショ、連絡が取れない知り合いのためにも、真相を突き止めて…」

カリーとデルコがCSIラボに戻つて、それぞれの作業を始める。カリーは石膏で固めた足跡から検証してみる。

もし、スピードルが傍にいたら、何だかのアドバイスがあつたはずだと想いを馳せて、もうこの世にいない。

足跡分析を得意とするティム・スピードルは、前任チーフだったメーガン・ドナーの愛弟子だった。無情髭を生やして、無愛想でだ

らしない格好といった科学捜査官らしくない風貌をしていたが、あらゆる意味でチームを支えていた。

ホレイショからも信頼を寄せていたスピードルが殉職してしまったのは2年半前のことだ、銃の手入れを怠ったために命を落とした。その影響でホレイショとデルコはどこかビビりで失態をしてしまう事態になつたこともあつた。

過去を引きずつたままでは仕事にならないと、カリーは足跡のサインズからおおまかな身長を割り出し（注1）、靴の減り方を見る。

「ねえ、デルコ、この足跡を見てどう思う？」

「先端が極端に減つている。これは運転手の足跡だよ」

「それってどういうことになるの？」

「初めてスピードルと手を組んだ時に、足跡を指摘されたんだ」

それはデルコがホレイショからスカウトされてから間もない頃の時だつた。

コンビニ強盗殺人事件の捜査で、初めてスピードルと手を組んだ時、足跡を指摘された。

先端が極端に減つているということは、長時間にアクセルなどを踏んでいる職業、つまり運転手と推定できる。

大学を卒業したデルコがポリス・アカデミーに入ると決めた時に、父親から勘当され、学費を稼ぐためにトラックの運転手をやつていた。それで足跡の先端が極端に減つていた。

デルコが過去の仕事を指摘されると、スピードルは「当たり前のことをしていただけだ」と言い返した。

「なるほどね。ところで、デルコ、指紋とDNAはどうなの？」

「DNAはヴァレイラに分析を依頼した。指紋は今のところではヒ

ットなし」

「エイフュースAFIS（注2）で引っかかればいいけど、時間がかかるよね。

弾道ならすぐに結果が出るけど……」

ウースト博士の秘書であるナティアを乗せた署内のエレベーター

がCSIラボに止まると、ホレイショの許へ歩み寄った。

「ケイン警部補」

「それが博士の留守電を録音したテープですか？」

「はい…」

「では、早速分析に回します。ところで博士についてお聞きしますが、何か変わった様子は？」

「わかりません」

「実は、博士はガンにかかりっていました。研究などで思い詰めたことは？」

「…………」

ナディアは口を閉ざした。隠しているのか、言いだせないのかのどちらとも言えるかのよつた顔をしていた。

ホレイショは彼女に問うことはしなかつた。彼女が答えなければ、証拠を探せばいい。

そこで別の質問をする。

「もしよければ、博士のオフィスか大学院の研究室を案内できますか？」

「はい…」

ウルフは、1週間前から失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディをしていたレベッカ・マー・ティンの自宅アパートから調べることにする。その前には非常口に対する捜索令状が必要とされるため、まずは1週間前から捜査官以外誰も立ち入っていない現場から見落としがないかどうかを調べる。

以前にホレイショから教えられたことがある。

誘拐はたいてい3時間以内に殺されてしまう可能性があるし、24時間以上経過するとFBIが捜査を引き継ぐことになっている。しかし、事件性が低いという理由で捜査しないことはあり得ない。何か隠している。

ウルフは殺人を隠している可能性があると信じて捜査を始める。

まずは、現場を観察し、メモを取り、スケッチを描いてから写真を撮る。次にゴーグルをかけて部屋を暗くしてから、フラッシュライトを点灯した。壁、床、天井などに当てて、見えない証拠を見つけ出す。

床に足跡を見つけると、スケールを置いてから写真を撮る。しばらくしてから緑色の纖維片を見つけて出すと、写真を撮つてからピンセットで取つて、証拠袋に入れた。

期待された血痕こそはなかつたが、ドアに貼り付けた指紋を採取することができた。ヘアブラシから髪の毛を抜き取つて証拠袋に入れると、ドレッサーに散乱した『ロサアスル』の蓋を開ける。中身は空だつた。全ての『ロサアスル』の瓶を開けると、中身が空だつたことから、一瓶を証拠袋に入れた。

その時、携帯電話が鳴つた。ウルフが応対すると、トリップ刑事が非常口への搜索令状が発行してくれたとの連絡が入つた。

ホレイショはナディアの案内で大学院の研究室へ入ると、ドアが少し開いていることに気づいた。

ナディアの中へ入らないように指示すると、腰のホルスターからシグ・ザウエルP229を抜く。

中に入ると、何者かによつて荒らされており、呻き声が耳に届くと、

「おい！しつかりしん！」

男が床で倒れていますのホレイショが見つけると、
「こちらCSIのケインだ。救急班を頼む」

携帯電話で救急班を呼んだ。

第3話 足跡は語る（後書き）

注1：小林・岡田計算式によると、 $82.50 + 3.53 \times \text{足跡長}$ （センチ単位）で身長（センチ単位）を推定できる。

注2：自動指紋照合システム。指紋をデータベース化したもので、1983年に日本の警察庁が初めて導入された。現在ではアメリカ・カナダ・韓国などの十数カ国の警察で導入されている。

第4話 怒りの矛先

「『ゴドノフさん？！』

『ゴドノフと呼ばれた男がストレッチャーに運ばれると、ナディアは絶句した。

ホレイショが「彼は？」と訊くと、ナディアはグラシア・コスメティック社の開発部主任のミハイル・ゴドノフ博士と答えた。

ナディアをウェスト博士の秘書としてスカウトした科学者で、『ロサースル』の危険性を訴えていたという。開発部主任でありながら、『ロサースル』をやめさせるように訴えていたのか、ホレイショは疑問を抱いた。

記憶が正しければ、CSIが捜査に乗り込んだ時には、ゴドノフはナディアの傍にいたし、服や靴が汚れていない。もし彼が犯人だつたら、証拠を残しているはずだ。

次にウェスト博士のオフィスにいた理由。もしかしたら、『ロサースル』の危険性を世間に知らせるために資料を探していたかも知れない。もしそうなら、何者かによつて襲撃されたことも合点がつく。

地球上にある元素で有害にならないものがない 大学時代（注1）に学んだものの一つである。それはどんな元素も組み合わせによって毒となりうることを指しており、薬品も同じことが言える。

FDA（アメリカの厚生省）はそれを承諾しているのか ？

薬品というものは、必ず副作用がある。だが、『ロサースル』には副作用が発表されていない自体がおかしい。グラシア・コスメティック社は何かを隠している。それを明らかにするには、まずは証拠を集めなければならない。

ホレイショは携帯電話でカリーとデルコにウェスト博士のオフィスから証拠を採取するようにと指示を与える。

『ゴドノフの命に別状はなく、治療医から尋問の許可をもらつと、

ホレイショはナディアと「ドノフに尋問を始めた。

「ゴドノフさん、貴方はグラシア・コスメティック社の開発部主任でありながら、『ロサアスル』の危険性を何故ですか？」

「ドノフは口を閉ざした。開けば、命がないと思い込んでいるかのようだった。

「無理に話さなくてもいいが、貴方が証言してくれなければ、被害が拡大するかも知れない」

「あの、ケイン警部補」

ナディアが口を挟むと、

「親友がグラシア・コスメティック社のセールスレディをしていて、1週間前から行方がわからなくて」

「何ですって！？」

「今でも捜査は続いているますか？」

「残念だが、それはお答えできない」

「でも、ケイン警部補。親友が殺されたかも知れないのに、警察はやはり役所の…」

「ナディア、これにはちゃんとした理由があるんだ」

警察が失踪事件の捜査がすることができるの事件発生から24時間で、それ以降はFBIが受け継ぐことになつていてと説明した。FBIが誘拐並びに失踪事件の捜査に乗り込むことができるの、1932年にチャーレズ・リンドバーグ（注2）の息子が誘拐され、70日後に遺体として発見されるという悲劇的事件を教訓にして制定された『連邦誘拐法』によるものである。

アメリカでは失踪事件は深刻な社会問題になつていて。その被害者の数は年間100万人以上、そのうち子供だけでも70万人以上にもなつていて。（注3）

「ケイン警部補、この怒りをどこにぶつければいいのですか？こうしている間でも親友が…」

「約束する。君の親友を必ず助け出してやる。それで名前は？」

「レベッカ・マーティン」

ホレイショはその名前に聞き覚えがあつた。1週間前にウルフが捜査を担当した事件の被害者の名前だった。化粧品会社のセールスレディをしていたが、何の化粧品なのかわからないまま、捜査を打ち切り、FBIのMPU（失踪者捜査班）に委託しざるを得なかつた。

1週間経つてもレベッカが見つからないといつことは、生存するかどうか判らない状態になつていて。事件発生後48時間以内に失踪者が見つからなければ、生存している可能性が低くなる。それにも関らず、FBIは何をやつているのか。

ホレイショは改めてFBIのやり方に強い憤りを抱いた。今度会つてきたら、必ず追求してやると。

その時、ホレイショの携帯電話が鳴り出すと、「失礼」と言いながら、病室から出た。

「ホレイショだ」

「ライアン・ウルフ。レベッカ・マーテインの自宅アパートの非常口から、纖維片を見つけました」

「指紋やDNAはどうした?」

「犯人は手袋をしていて、指紋やDNAは採取できませんが、足跡を見つけました」

「それで変ったことは?」

「先端が極端に磨り減つているのがあつて。犯人の中に運転手が含まれているかも」

「これは誘拐事件だな。纖維片と足跡を分析に回せ」

通話が終わり、終話ボタンを押してから、携帯電話を仕舞うと、ナディアが「何か?」と訊いた。

「君の親友は、誘拐された。犯人は恐らくグラシア・コスメティック社の者だ」

「ケイン警部補、実はあのテープに、レベッカが助けを求めていたものが含まれているけど……」

「それは1週間前の何時でしたか?」

「夜の10時ぐらい。レベッカが必死に助けを求めていると同時にグラシア・コスメティック社の管理部と名乗る男の声が…。もしかして、あの人たちがレベッカを誘拐したのでは?」

「ナディア、よく聞くんだ。君はグラシア・コスメティック社から目を付けられているかも知れない。実家でも身内の家でもいいから、早く安全なところへ移つた方がいい」

「お気遣いはありがたいですが、親友の安否がわかるまでここにいます。そしてゴドノフさんと一緒にグラシア・コスメティック社と戦います」

「一つ、約束したいことがある」

ホレイショはポケットから名詞を取り出して、ナディアに手渡すと、

「ほんの些細なことでいい。何かあつたら、この番号に連絡するんだ。いいね?」

「ありがとうございます、ケイン警部補」

「私のことはホレイショで結構です」

「カリー」

フィールドキットを携えて、ウェスト博士のオフィスに入ると、デルコはカリーに声をかけた。

「過去に何度か、ダイエットを試したことはある?」

「数え切れないほどよ。日本食とか、リンゴだけとか、ゆで卵だけとか…」

『弾丸ガール』の異名を持ち、ホレイショに匹敵するほどの正義感や根性を持つていてカリーでも、いざ仕事から離れると、アルコール依存症の父親に手を焼いたり、おしゃれを楽しんだりと、どこにでもいるような女性とは変わりない。

ダイエットに励まなくても充分美人なのにと言いたい気持ちを抑えながら、デルコは証拠を採取する。

10分経つて、カリーがウェスト博士のデスクに一枚の写真を見

つけると、

「デルコ」

「何か見つかった？」

長いブラウンヘアに青い瞳をした白人の少女の写真だった。かなり昔の写真なのか、ところどころで色褪せているところがあり、服装もフリルがついている。

カリーやは昔の記憶を呼び起^{ハサウ}と目を閉じる。

彼女の頭の中から、ある歌が思い出す。

“Somewhere . . .”

ミュージカル仕立ての映画、三つ編みに結ったブラウンヘア、Hプロンドレス、そして『虹の彼方へ』：

カリーやが昔見た映画の記憶が歌と共に蘇える。そして、ブラウンヘアの少女の名前も。

「パトリシア・アンダーソン」

「パトリシア・アンダーソンって？」

カリーやが呼吸を整えてから歌の一説を歌いだす。

“Somewhere . . .”

デルコが何か思い出したかのような口調で、

「ああ、『虹の彼方へ』」

「オズの魔法使い。ドロシー役で人気を博した子役。8年前から消息を絶っているけど……」

「何かスキヤンダルでもあつたのか？」

「何度かカムバツクを試みたけど、失敗続き。一部では子供を下ろしたとか流産したとかで、あまりいい噂を聞かないし」

「詳しいんだね？」

「Y染色体にはゴシップが存在しないの」

「そんなものかな？」

「そんなものよ」

と言いながら、カリーやとデルコが床を見下ろすと、紙に踏みつけた跡が見つかった。

「デル」

「先端が極端に減っている。同一犯の仕業かな?」

「写真を撮つて、ラボで比較してみましょう」

第4話 怒りの矛先（後書き）

注1：ホレイショはマイアミ州立大学で化学の学士号を取得したと
いう設定になつていて。

注2：1927年に大西洋単独無着陸飛行を成功した有名な飛行士。

注3：CSIシリーズと同じジェリー・ブラッカイマー製作総指揮
のドラマ「WITHOUT A TRACE/FBI」失踪者を追
え！」に、アメリカ本国の放送時や公式サイトにて実際に失踪した
人の情報を求めるコーナーを設けていたり、牛乳パックなどに失踪
者の写真を掲載したりと、様々な形で情報を呼びかけている。

第5話 隠蔽された失踪

ホレイショが病院から出て、CSIエラボに戻ると、ナタリアがUV写真を手にしてやつてきた。

「チーフ」

「この写真は？」

「虐待されたかどうか、UV写真を撮つてきたけど、それらしき痕が見当たらなかつた」

「それはメラミン色素によるシミだな。とにかく、ミトコンドリアDNAはどうなつた？」

「骨から採取して、精製しているところ」

ナタリアからの説明を終えると、ホレイショはUV写真をジッと見つめる。誰かに似ている。もし、写真の子供が成長すると、どんな顔になつていくのか。

以前、弟のレイモンドが潜入捜査中に知り合つたスージー・バナムの一人娘、マディソン・キートンの顔を見て、ホレイショは一発でレイモンドに似ていることに着目して、ヴァレイラにDNAをこつそり調べさせた。共通するアレルがあつたことから、マディソンはレイモンドの子であることがわかつた。

これは妻に対する裏切り行為だ。

ホレイショは弟に憤りを抱いた。予てから想いを寄せていたイエリーナを弟に譲り、一人の幸せを祈りながら、自分の想いを封印してきつた。

一人息子に恵まれ、幸せそうに見えたが、潜入捜査中に他の女と知り合い、その上妊娠させていたとは。

今さら血を分けた姪までを責めるわけにはいかず、自分が弟の代わりとして面倒を見ようと思つようになつた。だが、そのことが裏目に出て、イエリーナに誤解を与えてしまつた。

怒つたイエリーナはホレイショに何かと嫌味を言つ内務調査部の

リック・ステトラーとつきあい始め、亡き夫を忘れようと努力した。全ての誤解が解けるのに1年以上もかかり、潜入捜査中に命を落としたはずのレイモンドが麻薬取締局に転属するため偽装工作をしていたことを知ったホレイショは、ある組織から弟一家を守るために、証人保護プログラムでブラジルへ行かせた。

ブラジルで再出発し、静かな生活を送っていたはずの弟一家は、レイモンドが勝手に潜入捜査を始めた時からギクシャクし始め、ホレイショが妻の仇を追つて訪ねてきた時には、レイモンドは帰らぬ人となり、同じ名前を持つ息子も悪の道へ引きずられる寸前のところでホレイショに助けられた。

イエリーナとレイ・ジュニアがマイアミに帰ってきたのは、「」ぐ最近のことであり、イエリーナは仕事を探している最中だとジュニアから教えてくれた。

その一方、マディソンは、急性骨髄性白血病で入院生活を送っており、最近では適合するヒト白血球型抗原（HLA型）の提供者が見つかり、移植手術を受けたものの、回復する兆しが見られない。

ホレイショはあの時の勘を頼りに、ウェスト博士の娘の写真を見ている。

しばらくして、ナタリアに写真を借りてもいいのかと尋ねると、承諾してくれた。

AVラボに足を運び、分析員のダンに「写真からのシユミレー

ションを最優先に頼む。

シユミレーションソフトを起動し、スキヤナで写真を取り組むと、ダンは顔のパーツに手を加える。

頭や目が大きく、鼻と口が小さい子供の写真が、成長するにつれて、顔が長くなり、額の面積が狭くなり、鼻が大きくなることによつて、眉間と額の落差がつけられる。

顎のラインががつしりと形成され、円らな瞳が横長になり、口も大きくなる。

じつして完成された顔にホレイショは目を凝らした。見れば見るほどに誰かに似ている。

目を閉じて、記憶をたどつてみる。

先程、病院で会つた、ウェスト博士の秘書のナディア・スティーヴンスに似ている。

もし、そうなれば、ミトコンドリアDNAを調べる必要がある。ミトコンドリアDNAは母親のみから受け継がれるもので、変異がなければ、100年間保てられる。

ミトコンドリアDNAの配列が一致すれば、血縁関係がわかる。もし、ナディアとウェスト博士の娘の配列が一致すれば、二人は姉妹であることがわかる。

ナディアからDNAを提供できれば、事件解決への鍵が見つかる。問題はナディアがそれを承諾してくれるかどうか。

ホレイショがラボに止まらず、現場で走り回るのは、時間が経つにつれて、証拠能力が低くなることを懸念してのことである。これはかつて刑事を勤めていた時の勘である。

科学捜査官においては無駄なことだと思うが、単に証拠を分析するだけでは、解決に繋がらない。証拠というものは物であつて、犯罪を行うのはあくまでも人間。人間の行動があつてこそ証拠で、一秒でも間違うと、後に影響を及ぼす。

よく人から「犯罪者に對して一切容赦がない鬼捜査官」とか、「事件解決のためなら例え上層部でも噛みつく」などと言われるが、それは犯罪によつて泣かされている弱き者たちを助けるためであつて、自分の出世などは二の次である。そのためなら、自己犠牲を厭わない男。それがホレイショ・ケインである。

完成された成長写真がプリントアウトされると、ホレイショはAラボを出る。

その時、トリップがホレイショの許へ訪ねてきた。

「ホレイショ、まずいことになつた

「どうした？」

「ウルフが証拠を持ち帰ろうとした時、FBIが介入してきた」

「MPU（失踪者捜査班）か？」

「主任のカーライル捜査官が見えているんだ」

「わかつた」

ホレイショがマイアミ・デイド署のロビーに向かうと、ショートヘアのブロンズに赤いステッスを着た40代ぐらいの女が立っていた。FBI失踪者捜査班の主任捜査官であるマチルダ・カーライルがホレイショの姿を見かけると、

「ケイン警部補」

「カーライル捜査官」

「1週間前に失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディのことを再捜査していると聞いていたが…」

「荒らしに来たのか？」

「確かに我々は地元警察から嫌われている存在だが、いがみ合つてばかりは先は進まない」

FBIは州を跨いだ連邦犯罪に対しては逮捕権があるが、起訴権がない。そのため、地元警察に干渉することができるが故に嫌われている。だが、そういがみ合つてはいられない。

グラシア・コスメティック社のセールスレディの数は、アメリカ全土で500万人を突破し、その大半が『ロサアスル』を勧めている人が多く、使用者のほとんどは肥満に対する悩みを抱えていた。3ヶ月前からセールスレディが失踪しているにも関わらず、FBIは未だに捜査を進められていない。

時間が経つほど、生存している可能性が低くなり、最悪の場合は既に死んでいて、闇に葬られることだってある。

FBIが手を出せないという自体がおかしく、ホレイショは強い憤りを抱くが、カーライル捜査官は「だから貴方方地元警察から少しでも情報を提供してもらいたい」と頭を下げた。

「規則に触れるのはわかっている。私だって、15歳の娘がいる。娘は痩せる必要がないのに、『ロサアスル』を買ってほしいとせが

んできた。私が反対すると、娘は『そんなに頑固だから、パパから愛想を尽かして離婚を申し出たのよ』と家出したつくり、帰つてこない。私が間違つてているのだろうかと自問自答を繰り返しながらこの仕事に取り込んでいる

「そうか。だが、貴女は間違つていない。『ロサアスル』の魔の手から娘を守りたかった。ただ、それだけのことだつたのだろう?」

「その通りよ、ケイン警部補。愛する人を心配しない者は…」

マチルダがふとホレイショの亡き妻のことを思い出した。

「奥さんることは風の噂で聞いた。それはお気の毒に」

「義弟がマリファナを購入した件は?」

「それも聞いたわ。確かにマリファナは四大麻薬の一つとして国際問題化されているが、ガンに苦しむ人たちにとつては矢も得ないことも。だが、犯罪は犯罪。それを敢えて自分自ら背負つている。貴方は本当に自分に執着を持たないのね」

「それが俺の宿命だ」

カリードルゴがラボに戻つてくると、ウルフが駆け寄つてきた。

「やばいことになつた」

駆け寄つてくるなり、ウルフが口を開くと、カリードルゴが「どうした

のよ？」と訊いた。

「1週間前に失踪したグラシア・コスメティック社のセールスレディの再捜査で、FBIが圧力をかけてきたんだ」

「どうして勝手なことをするのよ？」

「それにはちゃんとした理由がある。ノナルド叔父さんが世話になつてゐるスポーツクラブのインストラクターの親友がグラシア・コスメティック社のセールスレディだつたんだ」

「それが1週間前に失踪した人というの？」

「そういうことだ。マイアミでもグラシア・コスメティック社のセールスレディが次々と失踪して、行方がわからないんだ。もしかしたら、殺されているかも知れない」

「チーフに相談したの？ レベル1の捜査官が勝手に捜査したら…」

「俺が許可した」

ホレイショが一人の会話を割るように口を挟むと、
「チーフ、許可を得たつて、いつ頃ですか？」

デルコが質問すると、

「FBIは3ヶ月前からグラシア・コスメティック社をマークしている。セールスレディが次々と失踪していることに不審に思い、1ヶ月前に令状をとつて捜査に乗り込んだが、収穫がなかつた

「何か圧力をかけられていることは？」

「恐らくある。だからFBIは自らの非を認め、我々に協力を呼びかけてきた」

「全く、呆れた」

カリードルゴが呆れた顔で言つた。

「とにかくチーフがそう言つなら、その化けの皮を剥がしにいきましょう」

その時、ホレイショの携帯電話が鳴り出した。

「ホレイショだ」

「ホレイショ」

受話器の向こうの声は、トリップ刑事だった。

「ナディア・ステイーヴンスが不審車に追突されたと通報があつた」「彼女は無事か？」

ホレイショがハマーで駆けつけると、ナディアはストレッチャーに乗せられて、救急車に運ばれようとした。頭には包帯で巻かれていた。ホレイショは救命士にバッジを見せると、ナディアに最初の供述をとつておく。

それによると、ナディアは病院から車で自宅まで戻ろうとした時に、一台の銀色の車が後をつけてきて、振り切ろうとしたが、追突された。

ホレイショは救命士に被害者が何か話し始めたら、それを覚えておくようにと依頼し、ナディアに代わりの検査官を病院で迎えられるように手配しておくと言うと、救急車の扉が閉まって、出発した。「ナタリア、今すぐERへ向かって、ナディア・ステイーヴンスから指紋やDNAの採取を頼む」

ホレイショは携帯電話でナタリアに指示をとると、カリーとデルコに現場へ向かうように指示を与えた。

駆けつけてくる間に、トリップは制服警官とともに現場を確保し、部外者を立ち入れないように配慮する。立ち入りテープが現場周辺を囲むと、カリーとデルコがテープをくぐろうとした時、レポーターのエリカ・サイクスが情報を得ようとした近づいてきた。

「相変わらず早い登場ね」

カリーが嫌味たつぷりな口調で言つと、エリカはウエスト博士の秘書がグラシア・コスメティック社には知られたくない秘密を握つ

ているのではないかと思つて、後をつけてきたと言い返すと、
「前にも言つていただけど、テレビに顔出しばかりしてないで、新聞
記者の仕事をちゃんとしなさいよ。もし命を落としてしまつたら、
花でも供えてあげるわ」

エリカは悔しそうな顔をしながら睨みつけると、デルコは無視してカリーエにテープを揚げた。

「大丈夫か？」

ホレイショがカリーエに声をかけると、
「平気よ。そんなのとっくに慣れてる」

カリーエはフイールドキットから乳白色のラテックス製手袋を嵌めて、タイヤ痕の写真を撮る。デルコはナディアの車を見る。ナディアの車は日産のマーチのアイリッシュ・シックリーム。後部に銀色の塗料が付着している。デルコは写真を撮つてから塗料を証拠袋に入れた。

ホレイショは運転席からドアを開いて、エアーバッグを調べる。

エアーバッグは車が衝突するとセンサーが反応し、センターコントローラーに信号が送られる。そこからエアーバッグモジュールに信号が伝わって、インフレーター内でガスを発生させて、エアーバッグが瞬時に膨らむ。この際、収納部の一部が押し破られて開き、完全に膨張したら、直ちにガスが抜けてエアーバッグが収縮する。

その時の衝突で顔面の打撲や擦り傷などの軽症を負う場合はあるが、ステアリングやダッシュボード、あるいはフロントガラスに頭から突っ込むよりはマシであるし、急激な気圧の変化で鼻血が出たり鼓膜を傷めたりする場合もあるが（注）、これも怪我の程度をより軽くするためには仕方がない。

例えエアーバッグが標準装備されていても、一旦作動させると交換に多額の費用を必要とする。これはエアーバッグ本体のみならず、センサー・ユニットまで一式の交換が必要なためであるので、仕方がない。

ホレイショは考えた。ナディアは自宅へ帰る途中に、一台の不審車に後をつけられ、別のルートを通つて、避けようとした。だが、

しつこくつきましたとわれて、もうダメかと思つた時に、車が追突され、ハンドルのセンター・パッドが押し開かれてエアーバッジが作動した。幸い彼女はシートベルトを装着していたために、怪我は軽く済ませた。

これはグラシア・コスマティックからの警告なのか ？
ホレイショはグラシア・コスマティック社を訪ねてみる必要があると判断した。

ナタリアがERに入ると、受付でナディア・スティーヴンスのことを訊く。一般病棟の相部屋に収容されると返答をもらうと、主治医に捜査に必要な証拠を採取するための許可を申し出る。主治医から5分以内に行うよつにと許可をもらひと、ナタリアは初めてナディアと対面する。

ナタリアは息を飲んだ。ある女性の面影が、一瞬にして蘇えつては消えた。

「ナディア・スティーヴンスさん、私はCSI捜査官のナタリア・ボア・ヴィスター。ケイン警部補からの代理として、貴女から証拠を取らせていただくことになつたの。ちょっとしんどいかも知れないけど、犯人を捕まえるためには必要だから、我慢してね」

ナタリアは、看護士に包帯を取り、ガーゼを取る。生傷が残つている頭部に写真を撮り、新しいガーゼで傷口を当てて、包帯を巻き直す。その間にナタリアはナディアから指紋を採取して、ファーリルドキットから綿棒を用意した。看護士が包帯を撤き終えると、ナタリアは綿棒でナディアの口内液を擦り付けてから、キャップに収納する。

「ご協力に感謝します」

ナタリアはナディアに挨拶すると、看護士はナディアを寝かしつけた。

ホレイショはトリップと共にグラシア・コスマティック社本社へ

向かった。本社ビルはマイアミのオフィス街の中にあり、周辺には数多くの美容整形クリニックが建っている。受付ロビーで待機する社員たちは赤毛の男にチラリと見ていた。

確かにホレイショ・ケインは、赤毛にサングラスと仕立てのいいスーツがトレードマークである。サングラスはオーストリアのシリエット社のチタニウム・モデル8568で、スーツはヒューゴ・ボスかプラダといったブランドスーツ。これは科学捜査班主任としては欠かせないアイテムで、特にサングラスは、紫外線だけではなく、凶悪犯から心を覗かせたくないがためには極めて重要なものである。どちらかといえば、女性が好まれる顔をしているが、男から見ても充分に魅力的だ。

女性社員からヒソヒソと話し声を耳にするが、捜査には必要のないものばかりなので、あえて無視している。

ホレイショはどちらかといえば、フュミニストである。女性には紳士的に接し、なおかつ懐が深い。自分から女性を振ることはほとんどない。だからと言って、ロマンスがなかつたわけではない。

例えば、義妹のイエリーナ・サラスとは、レイモンドと結婚する前から想いを寄せていいながら、弟の幸せを最優先にして自ら身を引いてきたものの、今でも密かに想いを寄せているような素振りを見せており、州検事のレベッカ・ネヴィンスとは部下を亡くした心の傷を打ち明けていながら、ある事件で司法取引を巡つて、ご破算になり、裁判で知り合つたばかりの弁護士のレイチエル・ターナーは、ホレイショに恨みを持つ凶悪犯に殺され、デルコがマリファナを買うきっかけを作つた姉のマリソルは、ホレイショが同情を寄せていくうちに恋が芽生え、結婚に漕ぎ着けたものの、新興マフィアによつて、短い生涯を閉じてしまった。

自分のことより、他人のことを最優先に考えるホレイショは、元々愛に恵まれていない、哀しい男である。マリソルを亡くした今でも、ずっと心に突き刺さつている。

受付係が社長との面会の許可の連絡をすると、ホレイショはトリ

ツプと共に社場へ足を運んだ。

第6話 憂しみの遠近（前編）（後編）

注…鼓膜が破れる場合もある

第7話 憎しみの遺伝子（中編）

ホレイショとトリップが社長室へ入ると、執務机で女がパソコンのディスプレイを眺めていた。

「警察の方だとお伺いしましたが…」

女が老眼鏡を外すと、ホレイショは田を疑つた。
結い上げたブラウンヘアに抜けるような白い肌に青い瞳。誰かに似ているような顔だった。

「私はグラシア・コスメティックCEOのエリザベス・アンダーソンと申します」

エリザベスと名乗つた女が二人の警官に握手を求めるが、
「マイアミ・デイド郡署のフランク・トリップとホレイショ・ケイン。実は一言では申し上げにいかと思いますが…」

「どうぞ」遠慮なく

「一つお聞きしたいのですが…」

ホレイショが口を開くと、

「グラシア・コスメティック社は、無店舗、広告宣伝は一切なし、
『ロサアスル』一品だけで、セールスレディを通じて顧客を増やしている。そもそもその『ロサアスル』という物は、いつたいどういうものでしょうか？」

「そうね、『ロサアスル』が店頭で一切販売していないかと申しますと、効きすぎるからです」

「効きすぎるとは？」

「『ロサアスル』は、我が社の名誉顧問でもあるウェスト博士が、某製薬会社からの依頼で開発した肥満治療薬を化粧品向きに応用したもののです」

「それはFDAから認可されているでしょうか？」

「もちろんですとも、ミスター・ケイン」

エリザベスの説明を聞くところによると、セールスレディの管理

の下でしか『ロサアスル』を購入することができない。そのためには、セールスレディが自ら広告塔として、3ヶ月の研修と称して『ロサアスル』とサプリメントとのセットを購入して体験しなければならない。

ホレイショはこの女が言つてゐることに胡散臭さを感じた。

まず問題はFDAからの認可が下りてゐるかどうか。

アメリカは日本のように健康保険が利かず、国民が支払う医療費が非常に高いため、日頃から健康補助食品などを摂取して、自らの健康管理に努めている。

FDAによる治験・審査承認体制は日本の厚生労働省薬務局よりも大きく上回り、栄養学においても20年先も進んでいる。それにも関らず、FDAは未だに一般流通では出回つていない『ロサアスル』を認可したのか。

次に値段が高価すぎる。『ロサアスル』とサプリメントのセットを3ヶ月で購入すると、5500ドル。もちろんクレジット契約も可能である。ちなみにCSEレベル1検査官の年収は3万4500ドルぐらい。1年通して購入すると、年収の3分の2。ブルーカラーワーク者でも手に届きにくい値段である。

これはピラミッド商法のひとつだとホレイショは思った。

1930年代にアメリカでマルチレベル・マーケティング（MLM）の誕生とほぼ同じ時期に生まれた問題商法で、商品を介して参加者から集めた膨大な資金を上部組織が分け合つ権利金ビジネスのことをしており、消費者自身が販売員も兼ねるディストリビューター方式を採用するMLMとは似て非なるものである。

だが、ホレイショとトリップが訪ねたのは、ウェスト博士とグラシア・コスマティック社との関連を訊くためで、ビジネスの内容を訊いてゐるわけではない。

そこでホレイショは万が一のことを訪ねることにする。

「それでもし、効果が現れなかつたら？」

「万が一あつたとしても90日間全額返金保証がつきますし、痩せ

てる方にも維持できるプログラムも用意してあります。貴方方の周りで肥満にお悩みの方やスタイルを維持されたい方がいらっしゃいましたら、こちらまでお電話ください

とエリザベスがホレイショとトリップに名刺を渡す。

「他に何か質問は？」

「今日のところはそれで結構です。後ほど改めてお伺いします」

ホレイショはトリップと共にグラシア・コスメティック社を去ると、

「ホレイショ、本題とは全く違った質問するのは何故なんだ？」

ホレイショがトリップの肩をポンと置きながら、これは揺さぶりをかけるためのジャブに過ぎないと言い返した。

証拠をいち早く保存することも大事だが、犯罪は人間が行うものである。第一に令状がなければ指紋やDNAを採取することができない。残されているものは、聞き込みだけ。ホレイショは本題から外した聞き込みを行つたのは、相手からの反応を知るためである。

「確かに、今の段階ではグラシア・コスメティック社とウェスト博士との関連は表面的に過ぎないからな」

「フランク、俺の勘なのだが、CEOのエリザベス・アンダーソンの顔、見覚えがあるだろう？」

「そういえば……」

フランクは事件が起きてからの記憶を断片的に思い起こす。ブランドンのショートヘアに青い瞳、抜けるような白い肌をした女の顔が一瞬にして浮かび出ると、

「ウェスト博士の秘書のナディア・ステイーヴンスに似ているな」「それで思つたんだ。ナディア・ステイーヴンスとエリザベス・アンダーソンは、血が繋がっているかも知れない」

「そういえば、ナタリアに指紋やDNAの採取を頼んだと聞いたが

？」

その時、ホレイショの携帯電話が鳴り出した。

「失礼」

トリップに断つてから、通話ボタンを押す。

「ホレイショだ」

「たつた今、ナディア・スティーヴンスから指紋とDNAを採取した」

電話の発信元は、ナタリアだった。

「彼女の爪も採取したか？」

「ミトコンドリアDNAのことね」

「これからERへ向かう。ナタリアは大至急、DNAの分析を頼む」

「了解」

ホレイショが携帯電話の終話ボタンを押してからポケットに仕舞い込んだ。

カリーとテルコはCSIラボに戻つて、ウェスト博士のオフィスから採取した証拠品とナディアの車を衝突した車の塗料片とタイヤ痕に分析を始める。

まずはウェスト博士のオフィスから採取した指紋と足跡。指紋はウェスト博士の自宅の庭に残した凶器の指紋と一致、足跡も庭に残されたものと一致した。

次にナディアの車を衝突した車の塗装片。車の塗装の違いから車種の特定が可能だと言われている。塗装は下塗り、中塗り、そして上塗りの三層で成り立つており、車種や型式や部位によつてどの塗料を使うかが決められていると言われている。例え同一車種でも生産時期によつては塗料を変更する場合もある。

主に塗料片を調べることができるのは、赤外線を照射して吸収率の違いを見せる赤外線吸収スペクトルや走査型電子顕微鏡による断面の観察、顕微鏡に付随するエネルギー分散型マイクロアナライザーなどの塗料の元素分析を行う。これを基にして該当する車種からの光沢や肌触りなどを確認する。

しかし、最近では下塗りに密着技術が高まり、ライトを覆うカバーも強化プラスティックが主流となつて、衝突する際に塗装片が落

ちなくなつたり、車種を異なつても同じ塗料を使つことにあるため、
捜査が難しくなつた。

手品師には必ずトリックが必要だと同じように、科学捜査にも証
拠が必要としている。

そこで「テル」は現場から採取したヘッドライトの破片から車種を
調べる。

最近の技術で、盗難車を追跡する目的で導入されたデータダット・
テクノロジーがある。それは微細な円盤の中にレーザーでIDを焼
きつける技術で、接着剤で車の部品につける。部品に刻印されたID
が特定できれば、車両に辿り着く。

データベースで調べてみたところ、メルセデス・ベンツCCLASS
50が昨日に盗難届が提出されたことが判明した。

後はホレイショに追跡システムの許可をもらうだけだ。

第8話 憧しみの遠近ナ（後編）（前書き）

（本編においての注意）

物語の進行上、分析結果などを短縮しています。

第8話 憎しみの遺伝子（後編）

ホレイショはトリップと別れて、ERへ足を運んだ。
医者から5分程の面会の許可をもらつて、早速ナディアに話しかける。

「大丈夫か？」

「ごめんなさい。貴方からの忠告を聞いていなかつたために、こんな目に遭つてしまつて」

「君は悪くないんだ。悪くないんだ…」

そう言いながら、ホレイショはナディアを気遣う。

「ホレイショ、ナタリアだつたのかな？貴方の代わりに指紋とDNAを採取しに来た捜査官は、最初からはつきり言つておけばよかつたのかしら？」

「何のことだ？」

「ウェスト博士の娘のことだけど、私に似ているのでしょうか？」

「ああ…」

「調べてもらわなくともわかるかと思つけど…」

「あの子は妹だつたと言つのか？」

「できれば、母のことを話したくなかったけど、ベッキーがいなくなつて、ウェスト博士が死んで、ゴドノフさんが襲われて、そして私までも…」

「ナディア、ウェスト博士が『ロサアスル』の素である肥満解消薬を開発するようになつたきっかけは、君の母親との出会いだと思うんだ。だから、君の母親のことを知りたい」

「私の母は、パトリシア・アンダーソンという女優で、4歳の頃からモデルを経て、11歳の時に『オズの魔法使い』と『ミュージカル映画』でドロシー役で人気を集めた」

「父親は？」

「わからない。恐らく映画プロデューサーか制作会社の社長か。彼

女が女優として成功するために誰かと寝て出来た。私を産んだ時は14歳だった」

ナディアの話を聞いた時、ホレイショは少女モデルを死に追いやつた母親のことを思い出した。（注1）

モデルとしての成功を押し付けられるのを嫌がつた少女は、山中で足を滑つて頭を打たれ、ヒルに血を吸われて命を落とした。少女の体内にはペッサリーが入つていた。それを入れたのは母親だった。堅物では成功できないからと黙つて、娘にペッサリーを入れた。結局母親を裁くことができないが、浮き沈みが激しい芸能界やモデル業界で成功するためには身体を売つてもいいものかと強い憤りを抱いた。（注2）

ナディアの母親であるパトリシア・アンダーソンも然りだが、彼女一人だけで娼婦の真似事など出来るわけはない。彼女の背後に母親の影があると思うようになった。

「君が生まれてからどうしたんだ？」

「ハリウッド（注3）の里親（注4）に育てられた。自分が里子であることを気づかないほど、愛情を一身に受けた。でも、ある日、自分がパトリシア・アンダーソンの娘だと知つて、里親に頼んで会わせてもらつた。13の時だつた。生まれて初めて人を憎んだのは

…

1997年、L.A.にあるサウスビーチ。

13歳のナディアは、養母と共に、実母のパトリシアを訪ねてやつてきた。

自分はもらしい子であることはわかつていた。別に育ててくれた親を恨んだり、憎んだりはしなかつた。ただ、自分を産んだ母親はどんな人なのかも知りたかつたからだけだつた。

いざ、会つてみたら、自分が思い描いていた母親のイメージとは、全くかけ離れていた。

抜けけるような白い肌、愛くるしい顔、細い手足。だが、失望する

のに時間がかからなかつた。

間近に見たパトリシアは、ビックリするほどに厚化粧で、田元には粉がたまつてひび割れてきた。むくんだけような、たるんだような、張りのない肌。

撮影の準備が整えるまでの30分間、パトリシアはメーク係によつて何度も粉をはたいてもらい、何度も田元を直してもらつた。助監督が「時間だ」と言つと、パトリシアはすぐに立ち上がりて撮影に臨む。その時、付き人が機転を利かせてナディアに娘だと紹介して何か一言言つたらどうだと言うと、

「冗談じゃないわ。私に子供だなんて」

「それ以来、パトリシアを心底憎むよつになつた。自分の子供を愛せず、容姿と人気のことばかりしか考えない醜いブタだと」ナディアは10年前のことを打ち明けると、ホレイショは「そうだつたのか」と同情の眼差しで言い返した。

「でも、あの時の養母は私を責めずに抱きしめてくれた。その時の温もりが身に染みて、胸が張り裂けてしまうそうだわ」「そつか…」

「ところで、貴方にこの家族は？」

「俺は家族を失つた。愛する人と巡り会えて、これからだという矢先に失つた」

「辛いの？」

「ああ、今も、とても辛い」

「ごめんなさい。氣を悪くしてしまつて」

「いらっしゃすまなかつた。話は変わるが、ウェスト博士が開発した肥満解消薬というのは？」

「それはゴドノフさんに聞いていただければよろしいのでは。彼はかつてウェスト博士の教え子だつたとか」

「わかつた。ありがとう」

ホレイショはナディアとの面会を切り上げて、医者にゴドノフの

病室を訊いた後で、一旦表を出て、携帯電話の電源を入れる。

留守電メッセージを聞くためにダイアルを押そうとしたその時、着信音が鳴り出した。

「ホレイショだ」

「チーフ」

電話の向こうの声はデルコだった。

「ナティア・ステイーヴンスの車を追突した車種を特定できました。メルセデス・ベンツCL5550。ヘッドライトの破片から調べてみたところ、昨日に盜難届が提出されたものと一致しました」

「車両班に連絡して、追跡してくれ」

「了解」

「それから、近くにカリーはいるか？」

「いますが？」

「代わってくれ」

受話器の向こうで「デルコ」がカリーに携帯電話を渡している様子が耳に届くと、

「もしもし」

「カリー、パトリシア・アンダーソンという女優に関する情報を、コシップからでもいいから、出来るだけ多く。それからグラシア・コスマティック社との繋がりも調べてくれ」

「了解」

ホレイショは終話ボタンを押して、電源を切ると、病棟に戻った。

CSエラボ内にあるDNA分析ラボでは、ナタリアが採取したウエスト博士の娘から採取したDNAの分析結果が出た。ほとんどの核内のDNAのほとんどが死滅されているが、ミトコンドリアDNAだけは辛うじて残っていた。ミトコンドリアDNAは核内のDNAに比べて、数が多く、なおかつ検査しやすいのが特徴で、1個の細胞内で500から1000個ぐらいに存在している。両親からの遺伝情報を受け継ぐ核内DNAに対して、ミトコンドリアDNAは

母親から受け継ぐ。子供のミトコンドリアDNAの遺伝情報は突然変異以外は母親と同じ配列のため、それを比較することで親子関係や先祖の調査が可能となる。

後はナディアの口腔粘液から採取したDNAを精製し、ウェスト博士の娘と比較するだけである。

一方、ウルフはレベッカ・マーティンの自宅アパートから証拠として持ち帰った『口サアスル』を綿棒で採取し、試料分析をかける。薬物の検査では、可能な限り早く乱用薬品かどうかを判定するためには必要な予備検査と確認検査が不可欠となっている。

予備検査では試薬と反応させて呈色反応を見る。メタンフロタミン（覚せい剤）にはシモン試薬（炭酸ナトリウムなど）、モルヒネやアヘンにはマルキス試薬（硫酸とホルマリンの混合液）、コカインにはチオシアノ酸コバルト試薬（コカイン試薬）、大麻にはデュケノア試薬が使われているが、LSDを検出する試薬は今のところ存在していない。予備検査で呈色反応を見た後で、裁判の証拠となる確認検査と続く。

確認検査ではガスクロマトグラフィーなどの科学的分析を経て、赤外吸収スペクトルや質量分析法が行われる。ガスクロマトグラフィーによって物質ごとの吸着性や溶解性の差をグラフ化にし、質量分析計によって明確に成分の定量を行つて、薬物の名を決定する。分析結果がプリントアウトされると、ウルフは目を疑つた。

第8話 憎しみの遺伝子（後編）（後書き）

注1：「USA・マイアミ」シーズン1第11話「吸血の森」の少女モデル失血死事件のこと。

注2：アメリカでは児童劇団や養成所などが存在しないため、組織によるバックアップは皆無。そのため売れる前に親の打ち込みによつて、子役の将来が決まると言われている。

注3：フロリダ州南東部、プロワード郡に位置する都市

注4：ナディアの里親は当時パトリシアの付き人を務めた者の遠縁に当たる。

第9話 失くした愛

デルコは車両班との協力を得て、ナティア・ステイーヴンスの車を追突した車両を追跡する。

レーザーで刻印されたヘッドライトのIDから現在地が特定された。サウスイースト1番街と2番街の交差点駐車場で車両を発見すると、デルコは破損されたヘッドライトとタイヤに写真を撮り、フロント部分から後部へ足を運ぶと、トランクが少し開いているのを見つけ、上げてみる。

男がくぐもつた声で助けを呼んでいる。デルコが「しつかりしろ！」と声をかけて、ベルトから無線機を引き出した。

「こちら、CSHのデルコ。救急班を頼む」

ホレイショはゴドノフがいる病室へ向かうと、「ゴドノフさん、話はナディアから聞きました。ウェスト博士のゼミナーをとる学生だつたと」

「その通りです、ケイン警部補。同年代でりながら、博士号を5つも取得した天才だと尊敬していました。だが、あんな危険な薬を作ることにこだわった原因は、『パトリシア・アンダーソン』にあると思つていた」

「その危険な薬というのは、『ロサアスル』の素となつた肥満解消薬ということですか？」

「『ロサアスル』は催奇性がある。元はと言えば、12年前にウェスト博士が製薬会社からの依頼を受けて開発したものだつた。私たち夫婦もその治験に参加した」

「奥さんは？」

「妻は同じ大学の同級生だつた。私たちは貧しくてもお互い頑張れば、何とか乗り越えられると信じてきた」

ミハイル・ゴドノフは、ロシア人の父親とキューバ人の母親との間に生まれ、幼少時に家族と共にキューバから亡命してきた。両親からの援助を受けて大学に通い始めたが、同級生でロシア系キューバ人のアナ斯塔シア・ナザーノフと知り合い、結婚したことで勘当された。

生活は貧しかつたが、2人で力を併せて頑張つていけば、何とかできるとひたすら信じてきた。

12年前、生活費を稼ぐために、夫婦はウェスト博士が開発した新薬の臨床テストのバイトに応募した。ところが始まってから10週目に入った時、多くの治験者が副作用が出了始めた。全身に広がる斑点、激しい炎症、中には組織が壊死した者がいて、実験は中止になつた。

ゴドノフ夫妻には副作用は免れたが、DNAに影響を与えたれることを知らぬまま、妻のアナ斯塔シアは妊娠し、出産した。生まれた子供の体には全身痣だらけになつており、生後3ヶ月で成長が止められたまま、2ヶ月後に命を落とした。将来を悲観したアナ斯塔シアはアルコールに溺れ、肝硬変でこの世を去つた。

残されたミハイルは、ウェスト博士に問い合わせたが、相手にしてもらえなかつた。同じような症例が出た者が存在したのにも関わらず、その事実は製薬会社と大学側によつて揉み消されていた。

真相を知るために、卒業後は製薬会社に就職し、新薬の開発に貢献しながら、肥満解消薬の研究をした。

それから8年、ボストン大学で勉強するために製薬会社を退職した時に、グラシア・コスメティック社からスカウトされ、再就職した。理由はウェスト博士がグラシア・コスメティック社の名誉顧問になつていたことだつた。

開発部主任として製造に携わりながら、社内の女性と関係を結び、動向を調べさせていた。そんな中でセールスレディ説明会に参加していたナディア・スティーヴンスと出会い、ウェスト博士の秘書としてスカウトした。

「ナディアを秘書として紹介したのは、ウェスト博士に近づくためだつた。博士はすごく気難しくて、秘書が次々と辞めてしまう。ナディアに声をかけたのは、パトリシア・アンダーソンに似ていたからだ。それがナディアの過去の傷を穿り返してしまつた」

「全ては復讐のためですか?」

「ケイン警部補、貴方に奥さんは?」

「私も家族を失つた。その気持ちはよくわかる」

「私はあの悲劇を繰り返すのを阻止したいだけ。それが復讐と捉えていてもいい。もし、復讐を遂げたとしても、失くした愛は戻らないのはわかっている」

ゴドノフの話を聞いていくと、ホレイショは妻のことを思い出してしまつた。

彼女は余命幾ばくもないことをわかつていながら、ホレイショに甘えてばかりでいた。ホレイショもホレイショで彼女に同情していた。そのためならどんな我が儘でも受け入れることを厭わなかつた。「もし私が死んでも、ずっと忘れないで」

マリソルから結婚を申し込まれた日の夜、ホレイショは初めて彼女の肌に触れた。青白い顔を赤く染め、切ない息遣いを繰り返す彼女を丹念に愛撫を施し、自分の通りを放つ。今思えば、これが最初で最後の情事だつた。

「もし神様が時間を延ばしてくれるなら、赤ちゃんを産んでみたいの。その赤ちゃんが貴方に似ていたらいいのにね」

マリソルのささやかな願いは、一発の凶弾によつて碎かれた。それでも彼女はホレイショにやさしく微笑みながら、予定していたイタリアンレストランの名前を言つた。

「まさか、今夜のディナー、すっぽかすつもりじゃないだろうね?」

結婚指輪を嵌めた左手を触れながらホレイショが言つと、マリソルは眠るように息を引き取つた。その時、ホレイショの青い瞳から涙が潤い始めた。

神よ、何故 ？

涙がポタリと落ちて、仕立てのよいスースを汚す。

「マリソル、もう少しだけ俺の傍で生きてほしかったのに」
白いハンカチで涙を拭つた後、義弟に連絡を入れた。

妻と子供を亡くしたゴドノフの悲しみと妻を亡くした自分の悲しみとは違うが、一度失った愛はもう戻れない。

だが、ブラジルでその一線を越えてしまった。義弟を助けるために矢も得ないことだつたが、殺人は殺人だ。地元警察から咎められたとしても。

「ケイン警部補、ケイン警部補」

「ゴドノフの声でホレイショの意識が現実の世界へ戻された。

「まさか、奥さんのことと思い出したのでは？」

「すまない」

「ケイン警部補。私が生きているとわかつていたら、何を仕返しされるかわからない。証人保護プログラムを適用できないのかと」「それは懸命だが、犯人を逮捕するのにはナディアや貴方からの協力が必要だ。知つていてる限りでいい。証拠になれるものがあつたら、こちらに連絡を」

ゴドノフに名刺を渡すと、ホレイショは病室を後にすると、ストレッチャーで運ばれている男の傍らでデルコの姿を見かけた。

「デルコ、その男は？」

「盗難車を追跡したところ、トランクに閉じ込められたところを助けました」

「車は？」

「押収しました」

「顔の傷を見たか？」

デルコはトランクから引き上げた時の記憶を辿つてみる。男の口には粘着テープで塞がれたことを除けば、傷一つもなかつたことを思い出すと、

「とりあえず、指紋とDNAを採取して、車を調べろ」

ホレイショは『エルコに指示を出すと、ERを出てハマーに乗り込んだ。

CSIラボに戻ると、ウルフが分析結果を携えてやつてきた。

「チーフ、失踪したレベッカ・マーティンの自宅から押収した『ロサスル』の分析結果が出ました」

「その成分は？」

「水、ミネラルオイル、グリセリン、水酸化ナトリウム、トリエタノールアミン、パラベン。そして注目しておきたいものは、チロシンの他に、DNPとANP」

「DNP ジニトロフェノール は主に染料や防腐剤、爆薬などに使われている。かつてはダイエット薬品として使われたことがあった」

「もしDNPが体内に取り込まれたら？」

「人体の新陳代謝を活性化してエネルギーを熱に変える効用がある。しかし長期間、大量に使い続けると、体内の熱で臓器が溶け出してしまう、そして死に至る。DNPが劣化するとANP アミノニアフエノールに変質する」

「念のためにセットとして購入しているビタミン剤を分析してみたところ、体内に必要なビタミンは検出されませんが、エフェドリン（注）とカフェインが検出されました」

ホレイショは思った。グラシア・コスマティック社の欲望の前では、個人の悲しみなどを利用して、顧みる価値はないものかと。ならば戦うしかない。例え相討ちになつたとしても。

第9話 失くした愛（後書き）

注：咳止め薬の成分。メタンフェタミン（覚せい剤）の原料にもなっている。かつてはこれを使ったダイエット薬品^{エフェドラ}が回ったが、高血圧、脳卒中、心筋梗塞などの副作用があつたために、FDAや日本の厚生労働省からの勧告により、ほとんどの国では使用を禁止されている。（現在でもエフェドラフリーとしてドラッグストアなどで売っているが、エフェドリンの危険性などを排除したためものなので、効用はそれほどでもない）

第10話 命あるかぎり

一夜が過ぎて、ホレイショがCUSTOラボへ向かおうとした時に、カリーエに声をかけられた。

「おはよー」

「おはよー、収穫はどうだ?」

ホレイショが言つた収穫とは、パトリシア・アンダーソンのことであり、パトリシアに関する情報を収集するように頼まれたカリーエは図書館から借りてきた過去の「ゴシップ誌やネット上での「ゴシップなどを集めてきた。

「出勤時間まで余裕があるけど、一緒に朝食をとらない?」

「いや、結構だ」

「チーフ、お腹が空いていたら戦ができないわ

「わかつた。君の誘いに乗るよ」

ホレイショが参つたように言つと、カリーエは心中でガツツボーズを取りながら、近くの食堂へ誘つた。

ホレイショはトーストとハムエッグにオレンジジュースを、カリーエはグリット（粗挽きとうもろこしのお粥）と生野菜サラダにコーヒーを注文すると、話を始める。

「まずはパトリシア・アンダーソンのプロフィールから」

「1970年3月10日生まれ、カリフォルニア州サンフランシスコ出身、4歳の頃からモデルとして芸能界に入り、11歳で『オズの魔法使い』のドロシー役を演じて人気を集める。それ以降、数多くの映画に出演したが、16歳の頃に出演するはずのハリウッド大作映画のクランクイン直前に降板したことで業界内外でバッシングを受ける。何度もカムバックを試みるが、失敗に終わり、8年前から忽然と姿を消し、現在でも生死不明となつてゐるわ

「生きれば、37になつてゐるといふことか…」

「おはよう、今日は珍しいわね？警部補と一緒に朝食を共にするだ

なんて」

ウエイトレスのイザベラがオレンジジュースが入ったピッチャーとグラスを持つてやってくると、

「ちょっとね、仕事に取り掛かる前の打ち合わせ」

「仕事熱心だね」

「仕事熱心はチーフのことよ」

「それで何の打ち合わせ…って、これ、パトリシア・アンダーソンの写真?」

「知っているの?」

「お祖父ちゃんが昔、映画館（注1）（グラインドハウス）を経営していて、私が映画を見に行つても咎められなかつたの。最前席で大人しく座つていたからね。（注2）そこでB級ホラーとか日本のやぐざものなどを見てきたけど、パトリシアが出演した映画も覚えているわ。ちょうどビデオの普及で閉館する直前のことなんだけ…」

イザベラが一人でベラベラと話している時に、ホレイショは数多くの雑誌を取り出して、ページを捲る。ある写真には目を皿にして、またある写真には無視するなどの繰り返しをしながら、必要な情報を引き出そうとする。その時、ある写真に目を止めると、

「カリー」

「どうしたの、チーフ?」

「ダンは出勤なのか?」

「休みじゃないけど…」

「ゴドノフが証言したとおり、俺たちが追つている事件の背後には、失踪した女優にある。だが、所詮は虚像に過ぎず、黒幕は身近に存在する」

朝食を済まし、C.S.エラボに出勤すると、ホレイショはA.V.ラボを訪ねる。ダンに写真を拡大するように言つと、手慣れた調子で写真が拡大されていく。荒くなつた画像に画素数を増やして、鮮明にしていくと、ある事実に気付く。

ホレイショは確信したように笑みを浮かべ、携帯電話が鳴り出す。

「ホレイショだ」

「ホレイショ、ハイアリア市の食品加工工場で、レベッカを保護したとの連絡が入ったの」

受話器の向こうのナディアを宥めながら、AVラボを抜け出して、駐車場へ向かう。

ハマーに乗り込み、一通りの応対を済ますと、FBIのカーライル捜査官の携帯番号を押す。

「カーライル捜査官、ホレイショだ。たった今、レベッカ・マーティンが食品加工工場で保護されたとの連絡が入った」

デルコは出勤早々から分析ラボで、昨日に採取した指紋をAFFISで照合してみる。

日本で最初に導入したこのシステムは、アメリカや韓国などの十数カ国で採用され、数多くの指紋データが登録されている。しかし、データベースに引っ掛かっても、必ず事件に結びつくとは限らない。指紋やDNAだけでは、陪審員たちを説得するのは難しい。

犯人を有罪にすることには、いくつの証拠が必要。CSI捜査官は、ただ証拠を採取して、分析をすればいいわけではない。どのようにして証拠を残していくのかを推理しなければならない。それらの証拠を基にして犯人を特定し、逮捕に導く。後は証拠品を裁判に提出し、証言しなければならない。

採取した指紋がデータベースに引っ掛かる。引き出された情報によると、グレコリー・ヤング、カリフォルニア州で窃盗罪の前科があつた。

データがプリントアウトされると、デルコはDNAラボへ足を運ぶ。

「ヴァレイラ、昨日、車のトランクに閉じ込められた男のDNAは

？」

考え方をしていたのか、分析員のマキシーヌ・ヴァレイラが我に返った様子を見せながら、デルコの質問に答える。

「ウェスト博士の自宅に侵入した犯人のDNAと一致した」

「それが、グレコリー・ヤング？」

ヴァレイラにファイルを見せようとすると、デルコは彼女の顎に小さなシミができているのに気が付く。

「ヴァレイラ、最近何かしている？」

「顎のラインが気になつて、友達の勧めで『ロサアスル』を使い始めたけど？」

「首筋に小さなシミがある

「えつ、まさか！？」

ヴァレイラがDNAラボを飛び出し、化粧室へ向かおうとするところ、ぐらつと眩暈がしてきて、そのまま倒れた。

「ヴァレイラ、ヴァレイラ、しつかり！」

デルコが起こそうとした時に、カリーが通りかかる。

「カリー、救急班を！」

食品加工工場にハマーを停めるとき、ホレイショはサングラスを外して、受付で用件を告げる。社員の案内でオフィスに向かうと、毛布をかけた女性 レベッカ・マー・ティンがいた。

ホレイショは被害者の目線を合わせるように跪く。これは相手に威圧感を与える、なおかつ信用を与えるための方法である。警察官というのは、対応によつては市民の敵にも味方にもなれる。ホレイショは常に相手の目を見て話している。言葉だけでは相手に伝わらない。そのためにはサングラスを外して相手を見る。

初めて見たレベッカは、ウェーブがかかった黒髪に黒い瞳をしており、かさついた白い肌には、シミが広がっていた。

これがウェスト博士が開発して失敗に終わった『ロサアスル』の副作用だったのか。

こみ上げる怒りを押し殺しながら、レベッカを尋ねる。

「君がレベッカ・マー・ティンさん?」

「貴方は?」

「ベッキー、ケイン警部補なの。貴方を捜してくれると約束してくれたの」

ナディアが説明すると、レベッカが顔を横に向きながら、「私の姿を見て、こう思っているでしょうね。そら見たことかって」「何言つているのよ。死ぬほど心配してたわ」

ナディアはレベッカをやさしく抱き締めた。

「ありがとう、ナディ。貴女のアドバイスを聞いていなかつたら、今頃は……」

抱き合つている二人を見て、ホレイショは女性たちの夢を粉々に碎いた悪魔を野放しにしてはいけないと思った。必ず尻尾を捕まえて、止めを刺してやると。そのためにはFBIとの協力と証拠が必要だ。

今のところは決定付ける証拠が揃っていない。だが、証人はいる。レベッカの存在こそが『ロサアスル』の功罪を世に知らせる数少ない証拠である。

間もなくして、FBIのカーライル捜査官がやってきて、事情を説明した。

第10話 命あるかぎり（後書き）

注1：アメリカでB級低予算の暴力・ホラー・エロスで満ちた映画を上映する映画館のこと。大抵は2、3本上映されていたが、1980年代に入つてからビデオの普及によつて、次々と閉館された。

注2：アメリカでの映倫は5段階になつてゐる。

第11話 黒幕の正体

ナタリアは病院に運ばれたヴァレイラがやり残していた作業を終えて、デルコに報告する。

「何かわかった？」

「ヴァレイラがやり残していたことね？ウエスト博士の自宅に侵入した男のDNAと車のトランクに閉じ込められた男のDNAが一致。でも、CODIS（注）に登録されたデータから、カリフォルニア州で恐喝罪で逮捕歴がある男がヒットしたの。ミッチェル・ヤングナタリアがミッチェル・ヤングのファイルをデルコに見せると、

「グレコリー・ヤングと瓜二つ、一卵性の双子だな」

「ミッチェルとグレコリーは、我々の追及を逸らすためにナディア・ステイ・ヴァンスが運転する二ッサンマーチをぶつけて、事件に巻き込まれたのを装つてグレコリーを車のトランクを閉じ込めたようね」「でも、何故わざわざこんな小細工を？」

「とにかく車の中を調べましよう

「その時、カリーガやってきて、

「ヴァレイラの容態は？」

デルコが声をかけると、

「大事には至らなかつたけど、許可をもらつてロッカーから『ロサスル』とビタミン剤を取り出して、分析にかけたの」

「それで？」

「昨日、ウルフが分析していたものと一致したの。でも、アメリカ全土で『ロサスル』を使用している者がこれだけたくさんいるのに、副作用が報告されていないのがね」

「もしかしたら、グラシア・コスメティック社が顧客を増やすために副作用を隠していたのでは？」

ナタリアが口を挟むと、デルコが口を開いて、

「そもそも医薬品やサプリメントは数々の検査や治験に合格しなけ

ればならない。もちろんFDAからの認可を受けないと市場に出回らない。でも、FDAがこんな危険なダイエット薬品を認可することはありえないことだけど

「車のトランクに閉じ込められた男はわかつたの？」

「車のトランクに閉じ込められた男はわかつたの？」
カリーガ問い合わせると、デルロはAFISでヒットした男のこと

を言うと、

「その男から取り調べましょ」

レベッカが救急車に運ばれるのを見届けてから、ホレイショは署に戻る。ラボに入ろうとするが、内務調査部のリック・ステトナーが近寄ってくる。

内務調査部とは、警察内の部署の一つで、警察官が犯罪組織から買収されたり、違法な逮捕の有無などを調べる、いわゆる警察の中の警察組織のことである。それに所属するリック・ステトナー巡査部長は、かつてはホレイショと昇進試験で競い合っていた縁があった。ステトナーが近寄ってきて「何か問題があるのかと思われる。

「ホレイショ、グラシア・コスメティック社のセールスレディの1人を捜していると聞いていたが？」

「たった今、ERへ運ばれた」

「なんだって！？ということは、見つかったということのか？」

「自力で脱出したと証言している。それに食品加工会社から該当する保養施設を教えてくれた」

「乗り込むつもりか？」

「あの失踪事件はFBIの管轄下にあるので、我々は別件でグラシア・コスメティック社を捜査しなければならない」

「ホレイショ、悪く言つつもりはないが、グラシア・コスメティックから手を引け」

「リック、そいつは人の面を被つた吸血鬼だ。己の欲望を満たすために弱き者から生き血を吸つて、法の目から逃れて生きている。今

更引く訳にはいかん」

と言いながら、ホレイショはその場を去つた。

「ダン」

AVラボへ向かつて、ダンを訊ねる。

「ナディア・スティーヴンスから預かつて、留守電テープはどうした?」

ダンが留守電テープをデジタル変換すると、

「ナディ、やつぱりあんたの言つ通りだつたわ」

電話の声の主はレベッカ・マーティンだつた。切羽詰まつたような口調でナディアに訴えている様子が伝わつてくる。

「『ロサアスル』は異常よ。シミがどんどん増えていく……」

その後、玄関チャイムを鳴らす音が耳に届いた。

「レベッカ・マーティンさん、グラシア・コスメティック社管理部の者ですが……」

しばらくして、レベッカの悲鳴と同時に留守電が切れる。

「1月16日、午後10時5分です」

音声メッセージの後で、次のメッセージが流れる。

「ナディア君、私だ。君の友達の居場所を教えてやろう。キー・ウエストにある通称保養センターと言われる所だ。そこには副作用が出た者を隔離する場所だ。ごく軽度の症状が出た者は所定の治療で完治できるが、君の友達は手遅れだ。恐らく薬物などを投与されて病死に見える方法で殺されるだろう。それから『ロサアスル』の本物のデータは私のオフィスの金庫に保管されている。万が一のために君に遺産を相続するようにと弁護士に依頼しておいた。最後に君に教えておく。君の母親パトリシアの母親は、グラシア・コスメティック社の……」

ウエスト博士の悲鳴が耳に届くと、留守電が切れて、

「1月23日午後11時48分です」

と、音声メッセージが流れた。

ホレイショは留守電メッセージが2つの事件の証拠となりつる

確信した。

「ダン、カリーガ持つてきたパトリシア・アンダーソンの過去の記事を分析できたか?」

「先ほど終わりました」

ダンはパソコンのディスプレイの前に座つて、パトリシア・アンダーソンの写真を表示した。その写真にはウェスト博士と一緒に写っていた。ホレイショは注意深く写真を見ると、背後に何か写っていることを気づいて、ダンに写真を拡大し、鮮明に表示するようと指示を与えると、

「それが黒幕の正体か…」

見覚えのある顔に思わずニヤリと笑みを浮かんだ。

カリーガトリップと共にERに向かうと、ヤング兄弟がすぐに走り出し、車に乗り込む。

すぐさま車のナンバーを記憶して、カリーガ無線で応援を呼んだ。ヤング兄弟の車が法定速度を20マイル（およそ32キロ）オーバーして逃亡する。パトカーがサイレンを鳴らしながら追跡する。逃亡車が6・25マイル（約10キロ）先までの交差点の信号を無視して突進すると、右から進入した車に後部をぶつけられて、スピンしながら電柱にぶつかった。

制服巡査がパトカーから降りて銃を突きつけて包囲すると、ヤング兄弟は観念して車から降りた。

手錠をかけられ、パトカーに乗せられて、マイアミ・デイド郡署の取調室へ入れられると、

「貴方たち、一卵性の特性を生かして、上手く逃れたかも知れないけど…」

カリーガそういいつと、

「足を見せて」

ヤング兄弟が仕方なく机に足を乗せる。

「両方とも先端が磨り減っている。貴方たちは2人で1つの犯行を

重ねた。ウェスト博士の自宅に残された足跡とDNAが一致すれば、刑務所行きとなるわ」

カリーガ証拠写真とDNA分析データを見せる。

「博士と娘を殺害しただけではなく、ゴドノフ博士と秘書を危害に加えたのも貴方たちでしょう?」

ゴドノフを襲った凶器から採取した指紋の写真とメルセデス・ベンツに付着した塗装片の写真を見せると、ヤング兄弟はショックを隠せなかつた。

「誰に頼まれたのか、詳しく教えてちょうだい」

ホレイショはウルフを呼び出して、ウェスト博士のオフィスへ向かつた。未だに解除されていない黄色いテープを潜り抜け、ウルフに金庫へ案内すると、

「ウルフ、トリップから聞いたところによると、君の叔父さんが金庫破りだつたと?」

「僕が11の時に叔父さんから教わつたんです」

「君の腕を見込んで、金庫を開けてほしいんだ」

ウルフはラテックス製の手袋を嵌め、扉に耳を当ててダイヤルを回す。慣れた手つきでロックが解除されていく。最後のロックが解除すると、

「チーフ」

「開けたか?」

扉を開くと、表紙に”TOP SECRET”と表示された書類とA6サイズのノートが置かれてあつた。

第1-1話 黒幕の正体（後書き）

注…DNA記録システム

第12話 残された良心

2日後、グラシア・コスメティック本社は、禿頭の警察官の出現で、受付が騒然となつた。

「マイアミ・ディド郡署のトリップだ。社長のエリザベス・アンダーソンに面会を願いたい」

「あつ、はい、しばらくお待ちください」

受付社員が内線電話をかけると、

「社長、警察の方がご面会に…」

内線を受けたエリザベスが青ざめた様子を見せながら聞き入れると、

「社長、今すぐこちらへ」

秘書の誘導で非常口を通り、社外へと出たその時、

「お出かけかな？」

ホレイショが仁王立ちで待ち構えていた。

「エリザベス・アンダーソン、署までご同行を願う」

エリザベスをパトカーに乗せ、署内の取調室まで案内すると、ホレイショとトリップが証拠ファイルを携えて入る。

「私に何の容疑でかけられたのか知らないけど、まずは弁護士をしてちょうだい。これからテレビ局からの取材があるので」

「それは延期してもらつた。貴女にかけられた容疑は、殺人教唆と誘拐罪だ」

ホレイショが証拠ファイルから通話記録を取り出して、エリザベスに見せる。

「2日前にグレゴリー・ヤングとミッチェル・ヤングを殺人、同末遂、並びに誘拐罪で逮捕した。ヤング兄弟はグラシア・コスメティック社の運転手だが、これは表向きで、本業は評判を落とさないために雇われた札付きの悪党だつた。主に『ロサアスル』を使って副作用が出た者を誘拐し、キー・ウェストの保養施設まで送り込む役

割を与えた。場合によつては貴女の手足となつて悪事を働いた。兄弟の通話記録から貴女の携帯電話番号が記録されている。ウェスト博士を殺すように指示を与えたのは貴女だ」

「ウェスト博士は我が社の名誉顧問なのよ。いろいろダイエットを試しても挫折した私を救つてくれた恩を仇で返すだなんて、馬鹿げているわ」

「それは説明会で『ロサアスル』を使わすための決まり文句。だが、調べはついている」

次にトリップが口を開く。

「組合（注）に問い合わせてみたところ、38年前に上演したミュージカルで主役に抜擢されたにも関わらず、興行的に失敗したことわかつた。その後、地方公演で食い繋いだが、3ヶ月後に体調不良で降板した」

「その時、貴女は妊娠し、時が満ちた頃に娘を出産した。その娘こそが8年前に芸能界から忽然と姿を消したパトリシア・アンダーソン」

ホレイショがパトリシア・アンダーソンの写真を見せる。長いブランウンヘアーに青い瞳、愛くるしい顔と抜けるような白い肌。見れば見るほどに、エリザベスに似ていることがわかる。

「貴女は娘に将来をかけた。彼女を女優として成功するためには、手段を選ばなかつた。かつて貴女が関係者に体を提供したように、娘にも強要した。そして14歳でパトリシアは娘を出産した。マスクミの追求から逃れるために、貴女は孫娘を当時の付き人の遠い親戚に養子を出した」

「出鱈目を言うと、名誉毀損で訴えてやるわ」

「孫娘の出生証明書と養子縁組の手続きを証明する書類が証拠だ。娘の存在を知らないパトリシアは、数多くの映画に出演を経て、ハリウッド大作映画の主役の一人に抜擢されたが、クランクイン寸前に降板した」

「10代半ばのパトリシアが、一人で降板するとは思えないわ」
2日前にラボの近くにある食堂で、朝食を摂っている時に、カリ
ーがそう言った。

「ただでなくとも、子役から大スターになること自体が難しいのよ。もし大作で主演して、多額のギャラが入つても、自分のものにはな
れないし、それを巡つて、両親が諍いを起こして離婚するし、当の
本人は酒やドラッグに溺れてしまうことが多いのよ」

「パトリシアも誰かの援助がなければ動かない傀儡の一人のようだ。
その黒幕は父親か母親のどちらかだ」

「DNAを比較できるサンプルがあればいいだけ…」

「それは既にある」

「当時のゴシップ誌で、パトリシアの降板で裏を引いたのは貴女だ
という記事がある。裏付ける証拠がないが、貴女なら監督などに口
出しすることは充分にありえる」

「そんなものは私でなくとも、大多数の子役の親たちだってそうよ
「それを境にパトリシアは過食症になった。何度かダイエットを試
みたが、失敗に終わつた。そんな時に出会つたのがウェスト博士だ
つた」

ホレイショはウェスト博士とパトリシアが一緒に写つていて「写真
をエリザベスに見せる」

「これは12年前に博士のスponサーだった製薬会社のパーティで
撮影されたものだ。その当時のパトリシアは25歳だった。その出
会いを裏で引いたのは、言うまでもなく貴女だ」

「写真の背景を拡大して、鮮明にした写真を指で示すと、

「貴女は博士が開発中の肥満解消薬の存在を知り、娘を実験に参加
させた」

ホレイショはA6サイズの手帳をエリザベスに見せる。

「博士のオフィスの金庫から、『ロサアスル』のデータと共に日記
を押収した。その日記にはパトリシアのことが記されていた。それ

によると、彼女は開発が止まつても使い続け、博士は薬を与え続けたと書かれていた。そうなつてしまつた時には既に遅く、パトリシアは薬を使うのをやめられなくなつた。人気が落ちる一方で、何度かカムバックを試みても失敗に終わり、その度に過食と薬の服用を繰り返して、彼女の肉体も精神もボロボロになり、8年前に博士の娘を出産したと同時に死亡したと日記は終わつていた。

「すごい想像力ね。私はそんな退屈な空想小説につきあつてている暇はないわ」

「ウェスト博士の娘がパトリシアの娘であることは、ミトコンドリアDNAで証明されている。パトリシアにはもう1人の娘が存在している。貴女の会社で勤務している者だ」

ホレイショはパトリシアのもう1人の娘の写真を見せると、エリザベスは一瞬にして凍りついた。

「ウェスト博士の秘書として雇われたナディア・スティーヴンスが、パトリシアが14歳で出産した娘だ。ナディアから採取したミトコンドリアDNAの配列が一致した。もし貴女のミトコンドリアDNAを調べれば、血縁関係もわかつてくるだろう」

エリザベスは言葉を失つた。

「一つ教えてくれ。娘を死に追いやつた貴女が、『ロサアスル』を世間に広めたのは何故だ？」

「それは決まつていてるじゃない。一度『ロサアスル』の効果を知つた女が例え副作用が出て危険だとわかつっていても、細い手足のほうを望むのは当然よ」

「そんな基準を誰が決めた？ 痩せれば健康で美しいとも思つているのか？ 最後に教えておく。例え刑事裁判で無罪になつたとしても、FBIの追求と民事訴訟からは免れまい。巡査、手錠を」

手錠をかけられたエリザベスはホレイショに睨みつけながら巡査に連行された。

翌日、ホレイショはウェスト博士と娘の葬儀に参列した。参列者

の中にはナディアやレベッカ、そして「ゴドノフ」がいた。

牧師が天に召される者に対する言靈を述べ、2つの棺は地中に埋められていく。

葬儀が滞りなく終えると、ホレイショはナディアたちに声をかけた。ナディアが代表してホレイショに礼を述べる。

「これまでいろいろとありがとうございました。何でお礼を言つたらいいのか…」

「そこまで礼を述べられても、ところで、ウエスト博士が君に遺産を相続するとメッセージを残してきたが…」

「実母と異父妹を不幸にした人からの遺産なんていりません。それよりも寧ろ、被害者に宛てるべきです」

「それなら相続放棄の手続きをとるといい。博士は悪魔に魂を売り渡しても、良心は残つてゐるはず。俺はその良心を信じたい」

「思えば、ベックキーを救いたいために敢えて危ない橋を渡つてきた。その苦労が報われることを思うと、何だか嬉しくて」

「そうか、よかつた。これから裁判で証言してもらつことになるが、大丈夫か?」

「大丈夫。私には味方にしてくれた人たちがいるから」

「それは心強い」

ホレイショが握手を求めるが、ナディアは応えた。

「ゴドノフさん、ナディアとレベッカを頼む」

「承知しました、ケイン警部補」

「ゴドノフに握手を求めるが、それに応えた。

「それでは裁判所でお会いしましょう」

3人がホレイショに別れを告げてからその場を去ると、テレビカメラがホレイショを追いかけてきた。

「ケイン警部補」

腐れ縁のエリカ・サイクスがマイクを持つてやつてくるが、ホレイショは「カメラを止めろ」とカメラマンに強く言った。

「グラシア・コスメティック社を潰すためにいろいろと取材してい

るようだが、裁判の邪魔立てをすると容赦はしない。それより『口サアスル』を使い続ける人たちに即刻中止してもらうような報道を行え』

サングラスをかけて、ホレイショはその場を去った。

第12話 残された良心（後書き）

注：俳優組合のこと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8037e/>

CSI:マイアミ 青い薔薇

2010年10月8日11時40分発行